

## 「おさしづ」第4巻における教会事情と「道」

『おさしづ改修版』第4巻(明治29～32年)における教会事情の「おさしづ」について「道」の用例を整理する。第4巻には教会事情の「おさしづ」が3,147件ある。そのうち、「道」が用いられるのは63件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは19件である。なお、教会事情の「おさしづ」のうち、「同じお言葉は、巻末に一括し、五十音順に配列した」(凡例)と記されている。第4巻の目次をみれば、教会の設置、地方庁出願、普請等の願いの「おさしづ」が非常に多い。それらは巻末にまとめられている。

今回取りあげる、「おさしづ」本文に掲載されている教会事情の「おさしづ」は、会長の交代や教会と教会の関係など、教会内の治まりに関する「おさしづ」がほとんどである。したがって、教会を治めるために、どのような心で教会の歩みを進めるべきかということが主題となっている。

## 艱難苦勞の道が大事

教会の事情に対する「おさしづ」において、艱難苦勞の道が大事だと説かれる。

道が大事、これまで艱難苦勞の道が大事。一人でも聞き分けてくれ。(さ30・2・19 郡山分教会山陰支教会長外役員一同身上の願)

年限いろへ道のありて、もうどうなろうか知らんへ。その道連れて通った道よう聞き分け。難儀不自由苦勞艱難の道連れて通って、種と言う。……道という、道に我という理どうもならん。我は要らん。(さ30・11・27 飯田岩治郎の件に付、北分教会所の事情、会長初め役員五六名立会の上先々心得のため願)

このお言葉は、「苦勞せよ」という意味ではない。「これまで艱難苦勞の道」や「難儀不自由苦勞艱難の道連れて通って、種と言う」とあるように、周りの目にはどうなるとも分からない艱難苦勞の道中を、神が連れて通ってこそその今があるのだということを中心に治めるように諭される。

## この道の元

それは「この道」の元、あるいは、始まりに立ち返って今の歩みを見つめ直すということである。

この道はどういう処から始まったか。……心の道が無くば、理は無いもの。今はどんな所あっても、元というは小さいもの。なれど、なかへの理やで。元分からんようではならん。ぢば始めた一つの理を聞き分け。指を折って数えてみよ。何年後数えてみよ。二年や三年で成ったものやあろうまい。誰がどう彼がどう、めんへ勝手という理があつてはならん。(さ32・5・31 前増野のおさしづよりだんへ本部役員協議の上城島分教会の事であろうとの事に付願(今分教会にては未だ会長定まらん付、……目下取定めに心配致し居ります。この処願))

さあへこの道という一つ道は皆容易な道やない。道という、道は、珍しい話から何を言うやらというような処から始めた道。皆雨の降る日もあれば又天気もある。これは道すがら。

……事情これまで互いへ道忘れんようへ、(さ32・12・29 高安分教会長松村吉太郎母さく身上よりおさしづあり、それより運び方高安分教会部内大縣支教会を分離の願……申し上げて願/押して、支教会を分教会に引き直しの願)

「この道」はどんなところから始まったか。元というは小さいもの。なれど、元が分からんようではならん。ぢば始めた一つの理を聞き分け。あるいは、「この道」という一つの道は、珍しい話から何を言うやらというようなところから始めた道である、と言われる。

## 道は一つ

こうして「この道」は教祖一人から、ぢばにおいて始められたのであり、その「道は一つ」であると繰り返し説かれている。

この道という、道は一つ教は一つ、遠い所それへ伝う心は日々受け取る中に、だんへ事情一つ、あちら事情こちら事情あつては心に楽しみ無い。(さ31・10・26 南海分教会長山田作治郎及び役員一同山田三女たみゑ出直し及び教会治め方事情願)

人の付けた道はいつまでも通るに通られん。世上は万筋の道、未だ仮の道、この道一条の道、元々一つに歩みへ、間違い重々取り違ひあつて一つさんげ。(さ31・10・14 東分教会治め方に付、山澤為造、永尾橋次郎出張中の処永尾婦部の上整理上に付願)

道は一つ、教はどうやこうやたゞ一つの理より理は無い。(さ31・10・19 榊井伊三郎係り郡山分教会と島ヶ原支教会との事情に付郡山より願)

第2巻、第3巻における教会事情の「おさしづ」の用例を整理した際に、「一つの道」あるいは「一つの理」ということが強調されていることを確認したが、ここでも「道は一つ」であることが説かれる。これは教会の治め方あるいは教会と教会の事情に対して説かれたことを考えれば、示唆的な言葉である。なかなか治まりがつかないという事情にあつて、「この道」の元に立ち返り、「道は一つ」であることを取り違えることのないようにと諭される。

## 道の理に心を合せる

その際、心を合せるということを教えられる。

道に間違いは無い。心の間違い。道の理に心の添わんというは、人間心の間違い。道の理と心の理と合わねばならん、合わさねばならん。(さ31・3・19 郡山部内津支教会事情願)

ただ、皆の心を合わせるというのではなく、「道の理」に心を合わせねばならないと説かれる。上記の「おさしづ」の言葉をみても、この「道の理」とは、「この道」の元、容易でないなかを長い年限掛けて親神が連れて通ってきたという「この道」の根本を指しているように理解できる。

このように第4巻の教会事情では、「この道」の元に立ち返って「道は一つ」であることが説かれ、その「道の理」に心を合せて歩みを進めるように諭されている。